蒙談

第 36 号

蒙 談 会 発 行

盃状穴の謎

―古代からのメッセージ―

柴田眼治

盃状穴（はいじょうけつ）は、古代の人々が何らかの祈りや願いを込めて岩や石の表面を穿（うが）って刻んだ凹穴の名称である。ヨーロッパではカップマーク（Cup Mark）と呼ばれ、北欧・フランス・エジプト・オリエント・シベリア・中国や朝鮮半島などに分布している。日本では山口市の古墳で二十三年前に確認されて以来、各地での発見が相次いでいる。盃状穴の起源は旧石器時代に溯るらしい。この穿穴の習俗は江戸時代にも盛行して、明治・大正時代まで続いた。古代から中世さらに近世までの盃状穴が見つかっているが、何のために行われたかの伝承がない不思議な遺物なのだ。

山口市の盃状穴

昭和五十五年（一九八〇）五月、かねてから山口市教育委員会によって発掘調査中であった市内大内上矢田（おおうちかみやた）の神田山古墳第一号石棺の蓋

神田山（こうだやま）（標高104ｍ、山口市大内上矢田）
地区の火伏せの神　秋葉社が山上に祀られている。
参道の一部から第一号石棺の一部が露出しており、
地元の通報によって発掘調査が行われた。

当時の新聞報道記事

西日本新聞 55.5.19

盃状穴石棺を発見

山口市の古墳群

天井石の表側に19個

わが国初 死者蘇生を願う呪術

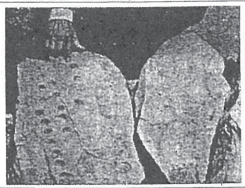
山口市神田山石棺群の1号石棺天井石表に刻まれた盃状穴（石棺上方は部内最奥部の土師器壺）

5.55.5.20 毎日新聞

石棺に盃状穴発見

山口市で わが国初 古代の日韓関係示す

死者の再生願う信仰



山口市内の神田山

読売新聞 55.5.20

わが国初の盃状穴

石棺の上ぶたに20個

山口 神田山古墳 死者の蘇生願う

盃状石棺上ぶたの盃状穴

朝日新聞 55.5.20

ナゾ多い箱式石棺の盃状穴

なぜ22個 なぜ山口に

神田山古墳 発掘調査ほぼ終わる

中国新聞 55.5.20

古墳前期の石棺

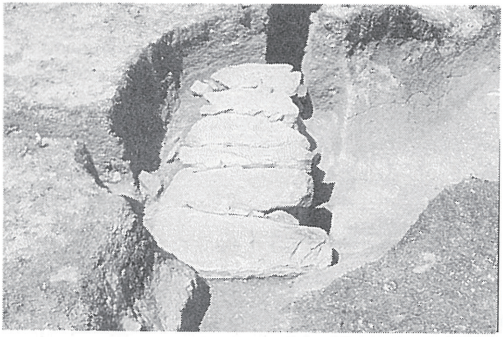
国内では初の確

朝鮮との交流裏付

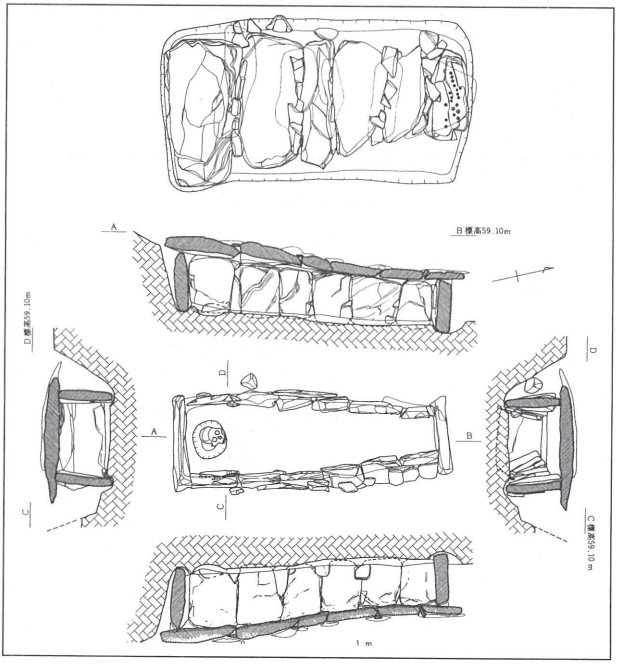
山口市神田山の箱式石棺に刻まれていた大きさ2～3㎝の盃状穴

石に二十一個の人工的な窪みが発見された。

五月十九日に依頼された梅光女学院大学教授国分直一博士が現地調査の結果「盃状穴」と確認された。直ちに新聞・テレビで国内初の大発見として報道された。私も家から南へ一キロ先に見える小山でのニュースに大いに興味をもった。市教委が一年後に報告した「神田山石棺」によると、小山には四基の組合せ石棺が発見された。盃状穴を認めた第一号石棺は九米の円墳の下に埋納され、時代は古墳時代前期（四～五世紀）の墳墓とされた。被葬者は唯一残っていた頭蓋骨前面部を九州大学解剖学教室の永井昌文教授が調査されて「二〇歳後半の男子」と鑑定された。棺内は赤色塗料が塗られていた。鉄剣一口・鉄製鉇（やりがんな）三点・碧玉製管玉一個・ガラス小玉四個が副葬されていた。組み合せ石棺の蓋台は六枚あって、脚部を覆っていた最北端の石板上に盃状穴が穿たれていた。ほぼ三



山口市教委調査報告集「神田山石棺」から転載

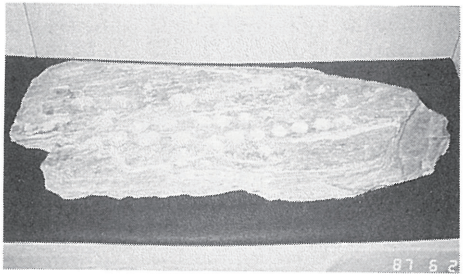


山口市教委調査報告集「神田山石棺」から転載
松岡睦夫氏原図

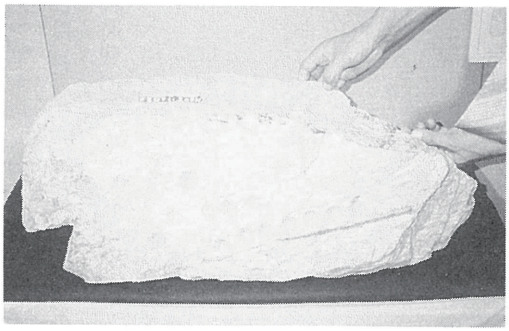
列に並んでいる。石の材質は結晶片岩であって、硬い先端の尖った紡錘状の石棒で、突つきながら、又回旋して穴を作製したものらしい。

国分直一教授は、山口市教育委員会報告集「神田山石棺」や「盃状穴考」において、盃状のくぼみは性シンボルを表現したもので、母胎への回帰、すなわち帰元思想の表れであろうとされた。国内外の事例や諸文献を通して次のように述べておられる。

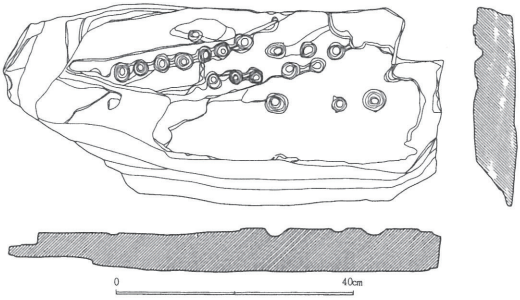
『盃状穴の事例としては、韓国京畿道琴南里では六基の支石墓の蓋石上に、盃状穴が見出されている。黄龍渾教授が撮影された写真を通してみると、その盃状穴の施され方は、わが三雲や山口盆地の棺材に施されたものに酷似している。しかしながら、酷似する盃状穴は朝鮮半島の先史時代においてのみならず、広く見出される。ヨーロッパ先史時代において最も早く発見され、時には研究的会議



神田山石棺
盃状穴石板
（72×33×7㎝）
山口市歴史民俗資料館展示



盃状穴の２個、３個、７個の直列部には連結溝が認められる。



第１号石棺蓋台実測図　市教委「神田山石棺」から転載

が行われたこともある。従って、盃状穴をとりあげる場合には、盃状穴の発見における先進地であったヨーロッパの事例を無視するわけにはいかないと思われる。

ヨーロッパ先史時代には、盃状穴の他に、円状の斑点を彩色で施す例が氷河時代の遺跡を通して知られている。沈刻の場合には、リアルな形象から抽象化の進められた三角文・円文へと展開することもわかっている。

ヨーロッパ先史時代における最も早い例としては、フランスのドルドーニュのラ・フェラシーの岩陰で発見されている。それは、ペロニーによって三角形の墓石とよばれた石の面に、不規則に施されたもの、盃状のくぼみ群である。その時期はムスティエ期に属しているとされる。その後、オリニャック期、更に降る時期、新石器時代、青銅器・鉄器の各時代にわたって発見されてきた。

これら先史時代・古代における盃状穴については、前世紀の半頃すでに論争があったのであった。しかしギーディオンは、「たとえば、ほぼ卵形をした墓穴、盃状の穴をあけたほとんど三角形に近い石板の覆いなど、それらは不確かで警戒を要するとはいえ、ひとつの共通の意図、すなわち**再生**や**不滅**の象徴を目的とした徴候である」と述べている。―中略―

歴史時代にはいって、盃状穴の象徴的用法を見る場合には、ギーディオンがいうように、エジプトの事例をとりあげるべきであろう。エジプトでは太陽と多産は円の形に合体されるとされる。

スウェーデンでは、いくつかの場所で異教の習慣がいまなお行われているとして、ギーディオンがあげた例は興味深い。

病気の子どもを治すため、その子どもをやわらかい獣脂に充たされた盃状穴のある石の上におく。それは、妖精や悪霊をなだめる供物であり、また家族の健康を見守る保護者である。

このギーディオンのコメントを読むと、盃状穴とのかかわりあいで、子どもの生命の恢復を願う習俗には、

先史時代以来の思想の伏流を見る思いがするのである。』

韓国慶熙大学の黄龍渾教授はカップマークを性穴と訳して朝鮮半島の多数の事例やスカンジナヴィア等の事例について国分教授が編集主幹する「えとのす七号（一九七八）」に寄稿され、次のように発表された。

『　韓半島先史時代の「性穴」考

性穴の発見

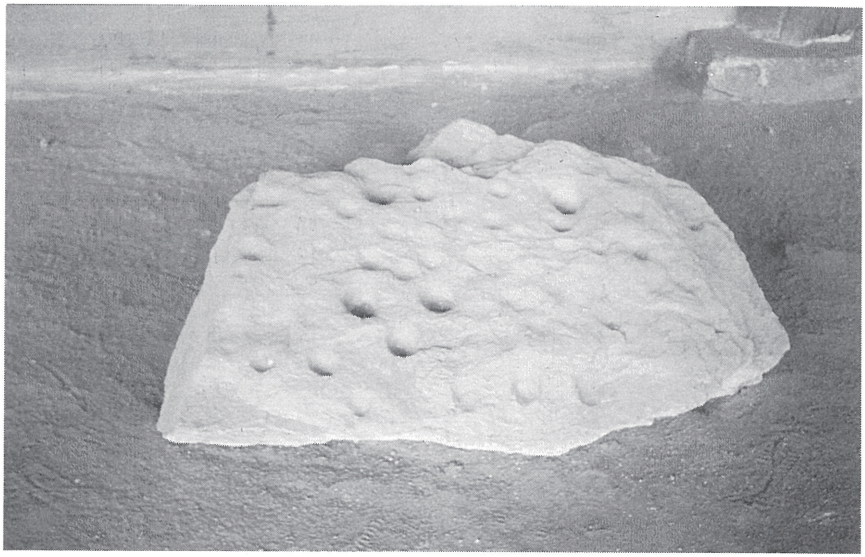
韓半島における、先史時代の岩刻に関心を持ちはじめたのは、一九七〇年以後のことである。

一九七一年に、嶺南大学校で高霊の良田里で、いわゆるアルト（卵地）とよばれた円形竪穴、直線または幾何文様の岩刻を岩画と発表された。その後、慶熙大学校博物館調査団によって、はじめて楊州郡和道面琴南里で、性穴（cup mark）が刻み込まれた支石墓の上石が、六基発見された。この発見で韓半島における性穴の存在が確認され、先史時代岩刻研究が始まったのである。

その後、東国大学校調査団によって、慶尚南道蔚州郡の斗東面川前里の岩刻にも、性穴があるのが確認されて、性穴の発見例が韓半島全域に及んで存在しうることが予想された。そしてその後、各地から性穴の発見例が続々と報告され、今では全国的に分布していることがわかった。―中略―

シベリアと北モンゴルの方面から流入したとみられる韓国の性穴信仰は、最初には外国の場合と同じく、生産と豊饒のシンボルとして存在したと思われるが、その後、鉄器文化が流入し、さらに中国の方から仏教が導入され、それが国家の基本的宗教として浮かび上がったとき、性穴信仰は衰退しはじめたが、仏教との連結を保ちながら、韓国的土着信仰の形態に変化していったと思わせる証拠が、発見されている。

このような信仰と関連した性穴は、慶尚北道月城郡の感恩寺跡東塔の基壇石の上にみられ、また慶州博物館にある新羅石獅子の頭の上に彫りこまれている。これらは、新しい仏教信仰にたよろうとする、受け身に



ソウル景福宮の回廊に展示されていた琴南里支石墓の盃状穴石
（山口市歴史民俗資料館名誉館長　内田　伸氏・撮影提供）

立った原始信仰の祈願の変化とみなされる。同じ形式の性穴が、高麗時代の仏教的石造物からも発見されるのは、土着信仰化した性穴信仰が、長いあいだ韓国的信仰として存在したことを示している。

このような先史時代性穴の集中遺跡は、〝アルト〟または〝アルバイ（卵岩）〟という名でよばれ、一種の祈願の聖地として使用されており、今でも田舎の婦女子は生男を祈るため、この性穴を尋ねている。出産を祈る婦女子の観念が、源泉的に生産または豊饒と関係があることはいなめない。したがって、これらの観念が先史時代信仰と同じ類形だということに注目する必要がある。

性穴信仰の一形態として、最近韓国で調査された例には、**得男を願う祈願行為**がある。性穴群は、数多い婦女子の聖地として、今でも使用されている。男の子がほしい女の人は、陰暦の七月の七夕の子正に性穴を尋ねて、七つの性穴孔に粟を入れて祈ったのち、この粟を韓紙に包み、チマ（はかま）の下にかくして下山

すれば、男の子を得ることができると信じているのである。

このような今日の信仰形態は、日本の方においても、性穴に卵を立てて祈れば得男するという地方信仰があると、伝えられている。

これと同じ系統の土着信仰として、最近まで流行したスウェーデンの農家の風習を取り上げることができる。スウェーデンでは、夜にバターをここの性穴に流し込んで祈れば、その年の農業と家畜の生産高が高くなる、と言われている、土着信仰があったのである。

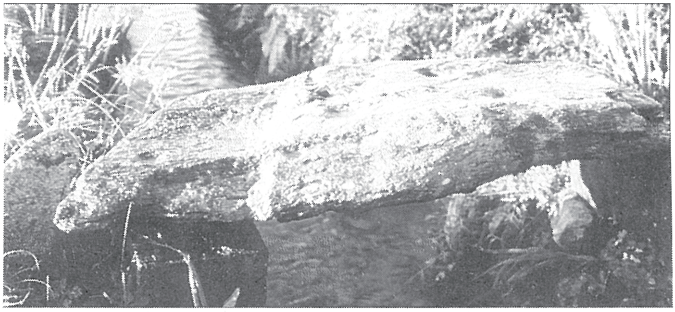
このような最近の性穴信仰においても、先史時代の基本的観念の姿をみとめることができる。すなわち、生産という共通的な観念が先史性穴文化から発生し、少しずつ変形したけれども、今日まで伝承された一つの民間信仰形態として残っていることに注目する必要がある。』

さらに、黄龍渾教授は、韓国で盃状穴が製作された年代は紀元前一〇〇〇年から五〇〇年前と述べておられる。この論文が、わが国へ紹介された盃状穴の最初の詳説である。神田山石棺の盃状穴は、福岡県三雲遺跡の支石墓の盃状穴と共に朝鮮半島からの伝播として注目された。

山口市大内矢田の盃状穴

平成五年秋、天気がよいので早朝の散歩に出かけた。自宅から百米南の畦道を歩いていると田の用水路に小さな石橋が懸っていた。表面は平坦だったが、もしやと思い下に手を入れて探ると窪みが触れた。ひっくり

大内矢田の用水路にかかる石橋
表面は平坦、裏側に窪み穴を触れた。彼方に神田山がみえる。



橋の石板をひっくりかえすと盃状穴があった。
（山口市大内上矢田）

この盃状穴石板も箱式石棺の蓋石らしい。

大内上矢田
橋になっている別の盃状穴石。かなり大きな石棺の蓋と思われる。

返してみると盃状穴が数個認められた。南に神田山が望まれる。すぐ近くの用水路にも上の写真のような盃状穴石が橋として使われていた。

神田山石棺の盃状穴が発見されてから、大内地区では三〇個以上の盃状穴石が確認され、平川、吉敷、大殿地区などからも次々に見つかった。山口とくに大内は盃状穴の宝庫である。中世の守護大名大内氏の始祖は百済の聖明王の第三王子琳聖太子という伝説がある。百済からこの地へ移住したと伝えられるが琳聖太子は推古天皇十九年（六一一）に防府多々良ヶ浜に上陸して多々良氏と称した。後に聖

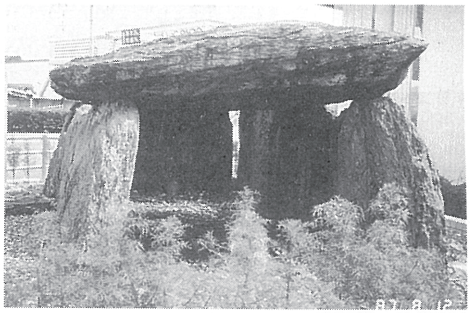
徳太子に謁して山口の大内県に封ぜられて、代々この地に居住した。大内とは地名学的に大(ひら)い土地という意味だそうだ。矢田とは八田、即ち荒地、湿地帯とのこと。この辺りは昔は湖沼地で問田川、仁保川の扇状地であった。今でも、平地の五米下からは川のグリ石が出てくる。周辺には弥生時代や古墳時代の遺跡が点在する。三～四世紀には湿地も乾上がり農耕が始まっていたのであろう。大内氏は、防府の多々良姓から居住した地名をとって大内姓としたのも、この時期以降と思われる。神田山の盃状穴を作った人達は朝鮮半島由来の習俗をもった渡来人であったのかも知れない。大内氏始祖は彼ら先人の跡を訪ねて来朝したとも考えられる。或いは半島文化が色濃いこの地区ゆえに彼らは、先祖は百済王の王族であるとことさらに強調したのかも知れない。近くの大内氷上には前方後円墳があり、六～七世紀には大和朝廷と結びついた豪族が居たのである。大内氷上には大内氏の氏神「北辰妙見社」があって北辰北斗信仰の聖地であった。神田山石棺の盃状穴の数は二十一個だが、被葬者が二十歳台の男子であることと関係はないだろうか。七の三倍が二十一であることも、この地の古代祭祀と古代からつづく星信仰との関係がありはしないかと思うのである。穴の規則正しい配列や数さらには最北端の足上の穿穴にも被葬者に対する思いが込められているはずである。国分先生がいわれるように盃状穴を穿つ習俗に対する考古学のみならず民俗学や民族学、人類学さらに文献史料学などの比較研究が学際的に、今後すすめば古代の謎が解明されるかも知れない。

田舎とばかり思っていた自分の住む大内が朝鮮半島、中国からシルクロードを経てオリエント、エジプト、フランス、イギリス、北欧などに連なる古代文化の潮流の中にあることに汎世界的なロマンを感じるのである。

熊本八代の盃状穴

昭和六十二年（一九八七）八月に大内史談会の竹重

勇二氏ら四名と熊本県八代（やつしろ）市へ自家用車で出掛けた。中国自動車道から九州自動車道を通り、当時終点だった八代Ｉ・Ｃで降りて市内に入った。道路の側に古墳の大きな石槨があった。鬼の岩屋古墳一号墳とよばれ、古墳時代後期の巨大墳墓で封土がなくなって石組みだけになって支石墓のようである。道路工事のために現位置に移動されたらしい。撑石と呼ばれる天井石に「盃状穴があるかも知れない」と云いながら上に登って見た。すると、何と見事な三つの大穴のまわりに多数の浅い小穴があるではないか。一同、興奮して写真をとったりした。大喜びで帰山後、国分先生に写真鑑定して貰ったところ盃状穴にまちがいないということだった。お弟子さんの熊本大学考古学教室の甲元真之助教授に連絡して頂き、二ヶ月後にわざわざ甲元先生と助手の女性の方で調査実測された。当時、九州の盃状穴としては、一番南の発見だったようだ。帰りに一同で八代



熊本県八代市　鬼の岩屋古墳
第一墳の石槨

天井石の上の見事な盃状穴
（筆者撮影）

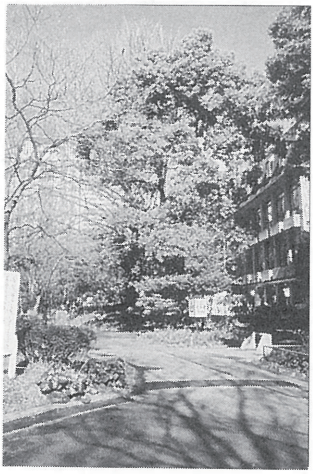
妙見社へ行き、この地の琳聖太子伝説の説明を聞いた。境内には白木神社があった。八代では琳聖太子は百済や新羅から此処に来たとも又、中国大陸から来朝したという伝説である。八代妙見祭りは大変に盛大である由。妙見は北辰北斗の化身なのだが、山口大内氷上の妙見社の近くで発見された多くの盃状穴は星と縁があるのかも知れないと思った。穴は古代の星座を表しているのではないかと想像したりした。実際に北斗七星の配列に穿穴してある例は加古川で見たことがある。

鬼の岩屋古墳の盃状穴はオリオン座の三つ星のようで、星とすると水や農耕と関係が深い。次に八代神社の星の宝剣を見せて頂いた。刀身に古代文字があった。甲元先生に御礼を申し上げて帰山した。

日比谷公園の盃状穴

七年前の平成八年三月、東京でのこと。所用まで時間が余ったために、近くの日比谷公園を歩いていた。中央噴水の水飛沫（みずしぶき）が、朝日にあたってきれいだ。レストラン松本楼と大銀杏の脇の遊歩道を通勤途中の官庁マン達が急ぎ足で霞ヶ関へ向っている。園内の雲形池から流れ出た小川にかかる石橋を渡りながら、ふと欄干を見ると無数の窪みが目に入った。親柱の上にも大小様々な盃状穴が彫られているではないか。傍らの説

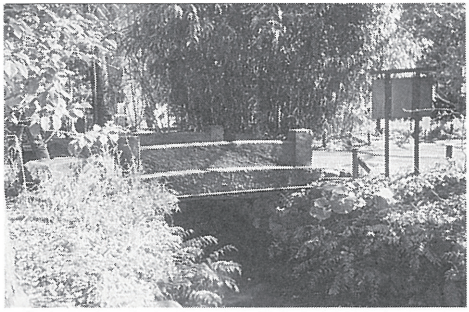
日比谷公園の大噴水
左のビルが厚生労働省



首かけ銀杏の大木と松本楼

明板には「この石橋は、芝増上寺霊廟の旧御成門前、桜川にかけてあった石橋の一つで市区改正の道路構築の時、ここに移したと伝えられています。素朴なうちにも力強く江戸時代の彫りの深さを漂わせています。」と記してある。盃状穴は数えてみると約百七十個あった。特に親柱には中央に煎茶々碗大の深い穴が穿たれ、

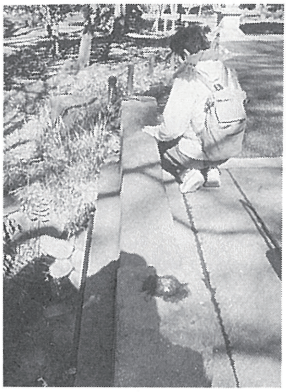
石橋の左右に盃状穴がある。



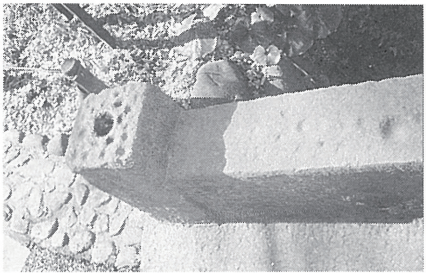
上流から見た石橋

東側にもcup mark が多数。

東側の親柱には12個と11個、手摺りには40個の盃状穴があった。



盃状穴を数える。西側には親柱に17個と17個、手摺り石には60個あった。



親柱には8㎝の深くて大きい穴を中心に同心円状に2～3㎝の浅い盃状穴。手摺りにも大小の穴。（西側）

周囲をとりまいて小穴が沢山あった。この石橋があった芝増上寺は徳川家康が江戸開府した時に、菩提寺として建立された。二代将軍秀忠をはじめ歴代の多くの将軍や夫人の霊廟が境内に造営されて関東浄土宗の本山として栄えた。最盛期には、京都の大本山知恩院を凌ぐほどだったという。

「図説　江戸考古学事典」によれば、

『　徳川将軍の埋葬地は紆余曲折の後に定まった。初代家康は、死後いったん久能山に埋葬されたが、後、日光山に造営された廟所に改葬された。家康に対する尊崇の念の篤かった三代家光は、自らの意思で日光山を墓所とした。

日光に埋葬された家康・家光、それに二〇世紀になって神式によって谷中に埋葬された一五代慶喜の三人を除く一二人の将軍は、芝増上寺または上野寛永寺の二寺院いずれかに埋葬されている。

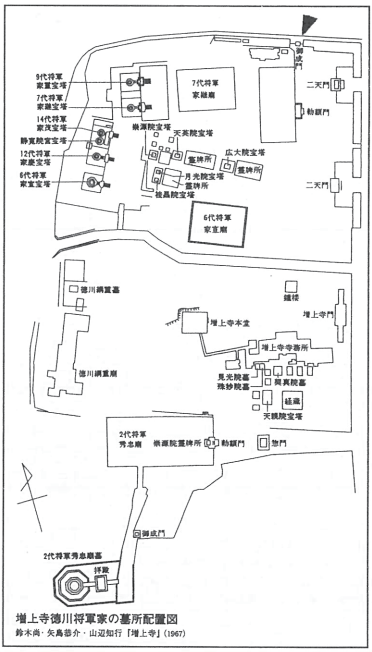
徳川家は当初、家康入府以前から江戸に存在した寺院の中から、徳川家の宗旨である増上寺を菩提寺とし、浅草寺を祈祷寺とした。しかし、一六二〇年に寛永寺を建立してからは、増上寺を菩提寺、寛永寺を祈祷寺として位置づけた。ところが、二代将軍秀忠は増上寺に埋葬されたものの、四代家綱・五代綱吉は、立て続けに寛永寺に埋葬され、寛永寺は回向を行う菩提寺としての役割も兼ねることとなった。

これに対し増上寺の抗議もあって、六代家宣以降は遺命により葬地を決定することとされた。このことは、実際には幕閣によって両寺の均衡が図られたものと見なされている。

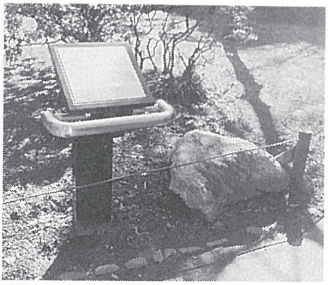
徳川将軍の墓があった二大寺院の一つ、芝増上寺は第二次大戦下で空襲に遭い、壮麗な霊廟建築は灰塵に帰し、二代将軍秀忠の木造宝塔も失われた。秀忠の墓は他の将軍と比較して格段に規模が大きくもかつ南方に離れて単独で位置していた。一方、六代家宣以下五将軍の墓は、北方の台地上にまとまって配置されていた。増上寺の徳川家の墓は、一九五八年から六〇年にかけて改葬されたが、この時、人類学、考古学などの

研究者によって総合調査が行われた。（古泉弘）』

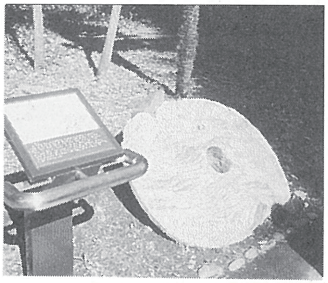
増上寺は江戸城から西の方角にあたり、阿弥陀如来の西方浄土にあてられたのであろう。上野の寛永寺の根本中堂には東方薬師瑠璃光如来がおられ、二ヶ寺は東西の別天地であった。また表と裏の鬼門鎮めの二大寺院でもある。御成門は右の増上寺古図によれば北東すなわち丑寅の方角にあった重要な門である。その門前橋であるから、ただの橋ではない。そこに無数の盃状穴である。桜川が現世とあの世の境―三途の川と考えれば此岸から彼岸へ渡る有難い橋である。死後の魂の救済を願って盃状穴が江戸庶民によって密かに彫られたと考えたい。極楽往生の強い願いが百八の煩悩を超えた数の盃状穴を生んだのかと想像を逞しくした。さて、日比谷公園だが、案内によると明治三十六年（一九〇三年）六月一日、日本初の洋式庭園として開園した。今年で百周年だそうだ。幕末までは松平肥前守等の屋敷地で、明治初期には陸軍練兵場があった。現在は都立公園として都民憩いの場となっており、南極の石やヤップ島の石貨、スウェーデンの古代文字石碑など珍しいものもある。松本樓は安



芝増上寺の古図
矢印が御成門（筆者記入）
「図説　江戸考古学事典」
柏書房（2001.4.25）から転載）



南極の石



ヤップ島の石貨

スウェーデンの
古代文字石

保闘争のデモ騒動で焼失したが、都民の支援で再建された。都民感謝デーとして一年に一回十円カレーがふるまわれて有名だ。テラスの側の大樹は首かけイチョウと呼ばれている。明治三十四年、日比谷通りの拡幅工事のため伐採されることになっていたが、公園の主任設計者の本多静六博士は、自らの首をかけて移植した為にこの名がついた。よく活着して園内一の太い銀杏に育った。盃状穴の石橋は、この木の傍にある。四季折々の花壇を賞でながら園内を散策するのも愉快である。都内には浅草寺と池上本門寺にも盃状穴がある由。

江の島の盃状穴

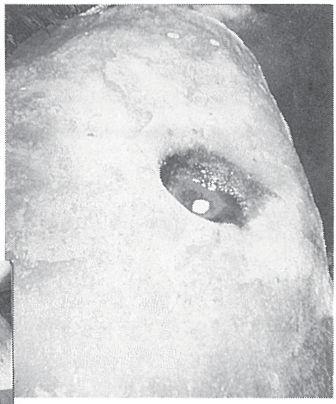
神奈川県　江の島

平成十年の春、家族三名で鎌倉に行った。鶴ヶ岡八幡宮や鎌倉大佛をお参りして、ついでにと江の島まで足を伸ばした。右彼方には白雪を戴いた雄大な富士山を望み、左手にはヨットやウィンドサーフィンの帆と青い海が爽やかだった。島につくとサザエやアワビなど磯の幸が一杯並べられ、多くの人達で賑わっている。色とりどりの土産物を両脇にみながら参道を登ってゆくと酒蒸し饅頭の湯気と甘い匂いが漂ってくる。白浪五人男の弁天小僧菊之助ゆかりの岩本楼の門前を通って登りきると江島神社と大書した石柱がある。東郷平八郎書としてあった。江の島

弁才天は安芸の厳島弁天、琵琶湖の竹生島弁天と合わせて日本三大弁天として有名だ。島の南に太平洋に面して弘法大師空海上人修行の岩窟がある。宗像三女神と習合して辺津宮に市杵島姫、中津宮に湍津姫、奥津宮に田心姫が祀られている。辺津宮の宝物殿には琵琶をかかえた裸弁天が安置されている。江戸庶民の人気が高く、参詣人が絶えなかったという。さて瑞心門を潜って右上に登ると「福石」という巨石がある。福石の表に大小三個の盃状穴があった。石碑と説明板があって、杉山和一という江戸時代初期に活躍した医師ゆかりの場所らしい。調べてみると、杉山和一（一六一〇～一

江の島神社瑞心門

注連縄のはってあるのが福石。右は杉山和一記念碑


福石上の盃状穴

手前の窪みと落葉のたまっているのが盃状穴

六九四）は伊勢の人。藤堂藩士の家に生まれたが、幼くして失明したために家督を義弟に譲って江戸に出て検校山瀬琢一について鍼術を学んだ。生来の不明と不器用が災いして破門された。奮起した彼は江の島弁天の岩窟に詣でて祈願した。三・七、廿一日の断食行を満願した日の帰り道、この石に躓いて転倒、失神した。弁才天女のお姿を拝したとみるや正気に戻った。手には松葉の入った細い竹筒を握っていたという。そこで管とハリを作って独自の鍼術を始めた。神効があってよく病気が治ったので次第に名声が広まり、招かれて五代将軍綱吉の病いをこの鍼術によって治癒せしめた。

杉山和一（日本醫学史）

やがて二百石を賜り、総検校に叙せられた。杉山流鍼術の講習所を四十五ヶ所に設けて医生の教授指導を行なったという。

以後、この石は福石と崇められ、囲りの小石を持ち帰ると頭がよくなると云われて信仰をあつめた。ハリの起源は古代中国の東方地域にある。砭石（へんせき）という先の尖った石で身体表面の経穴というツボをつついて治療した。丁度、石棒で岩石に盃状穴を作るようにである。もしかすると福石は、杉山検校以前から病気治しの縁起のよい石として民間信仰があったのかもしれない。天女の島に性シンボルの盃状穴があるのも面白い。私達は江の島の岩屋をめぐって悠大な大海原を眺めて帰途についた。古代インドではサラスヴァティというヒマラヤ山の雪どけ水の妙なる音を神格化して生まれた女神が、日本では弁才天として尊ばれた。サラサラと流れる河の音は弁舌さわやかな効験を与える天女とされた。妙なる音楽にも聞こえ、技芸の守護神とされた。わが国では鎌倉期あたりから七福神の一人になった。太平洋の荒波の江の島やおだやかな淡水湖の竹生島、瀬戸内の静かな波の音の宮島、それぞれ異なる水の波動が三大弁天の特性を表している。

下松市の盃状穴

下松市のＪＲ下松駅北に金輪（かなわ）神社がある。その境内の手洗水鉢の縁に盃状穴がある。側に七星降臨の鼎松（かなえのまつ）が立っている。ここは琳聖太子伝説発祥の地で北辰星が古松に降ってきて七日七晩輝いたという。七世紀の話である。降松から下松となった。市では星降る町としてＰＲしている。百済津が転訛したとも伝わる。隕石の落下説もあっておもしろい。

金輪神社　手洗水鉢の盃状穴

金輪神社（下松市北斗町）
中には星のマークのついた御神輿がある。

穴の彫り工合からするとかなり古そうだ。

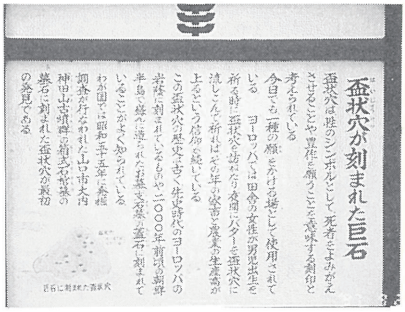
山口市内の盃状穴

山口市大殿地区は前述の大内氏の居館

大内氏築山館跡の盃状穴
周囲の板石は石棺の組合せ石のようだ。（八坂神社境内）

があった処だが、現在の八坂神社の境内に自然石に多くの盃状穴がある。又、近くの野田神社の能楽堂の東側にも長い巨石に盃状穴が彫られている。

野田・豊栄神社境内、
今八幡の小山の麓



盃状穴が刻まれた巨石

盃状穴は性のシンボルとして、死者をよみがえさせることや豊作を願うことを意味する刻印と考えられている

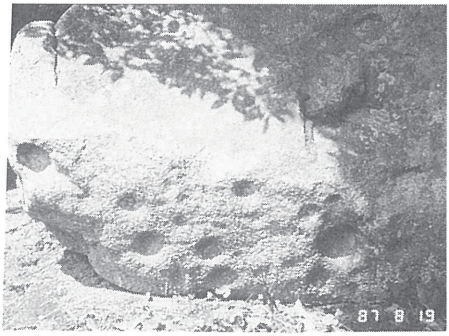
今日でも一種の魔よけの場として使用されている　ヨーロッパでは田舎の女性が男性生殖器を祈る時に盃状穴を掘ったり、婦人がこれに盃状穴に流しこんで祈れば、その年に妊娠の生産物が上がるという信仰を続けている

この盃状穴の歴史を古く先史時代のヨーロッパの岩体に刻まれているものや二〇〇〇年前頃の新羅半島、韓国に遺られた石墓支石墓の盃状穴刻まれているものがよく知られている

わが国では昭和三十五年に奈良県飛鳥村で行われた山田寺大内神社山古墳の横穴式石室の墓石に刻まれた盃状穴が最初の発見である

巨石に刻まれた盃状穴

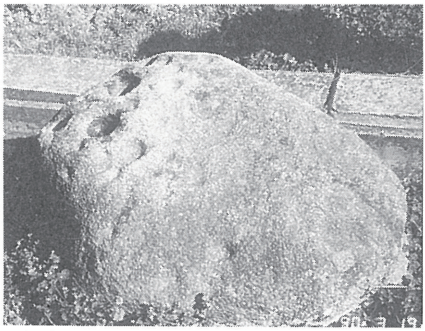
説明板（八坂神社境内）
大内氏も何か祈ったのだろうか。



上の巨石の近接写真

山口県美和町の盃状穴

県東部にも山口県埋蔵文化財センター所長の中村徹也氏の指導で多くの盃状穴が見つかっている。錦町でも錦川沿いの大岩盤上にある盃状穴群は、加古川市の盃状穴研究家三浦孝一氏のご案内で見た加古川市の弥生時代の飯盛山テラス上の盃状穴とよく似ていた。美和町の盃状穴石は一九九三年にコペンハーゲンのデン



美和町の盃状穴
（筆者撮影）

マーク国立博物館の先史室で見た丸石のカップマークとそっくりだった。播磨石造美術研究会の三浦孝一氏は縄文期のものかと推定しておられる。

近接写真（美和町石）
デンマークの丸石盃状穴とそっくり

伊勢神宮の盃状穴

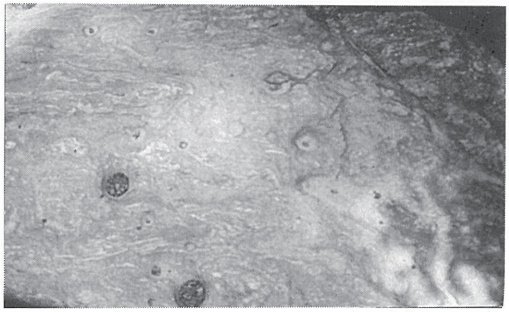
伊勢の外宮、豊受大神のお社から荒祭宮多賀宮への参道の途中にある亀石と呼ばれる巨石の橋があるが、この表面にも盃状穴がある。外宮荒祭宮は吉野裕子博士によれば密かに北斗七星を祀るお宮である。星と盃状穴の関連を想像する。

伊勢神宮・外宮の亀石

ヨルダン・エジプトの盃状穴

内田伸先生は神田山石棺発掘時の山口市歴史民俗資料館々長で郷土史に関する権威であるが、ヨルダン・エジプトの盃状穴の写真を撮影されたものを一九九五年に頂いたので、ご紹介する。

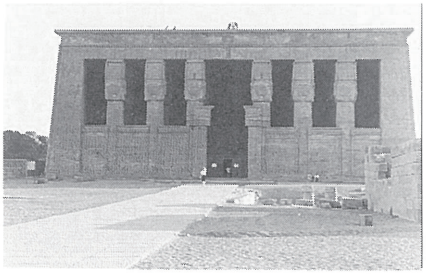
前記の三浦孝一氏は歴史民俗誌「娑羅十八号」にこ



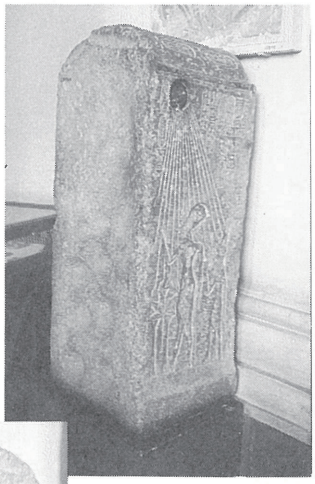
亀石上の盃状穴。一部は甌穴のようでもある。

田伸氏が発見されたローマ時代（B.C.～A.D.400）の城塞跡の盃状穴

イラク戦争で有名になったヨルダンアンマン市、城塞跡（内田伸氏撮影提供）



エジプト　デンデラのハトホル神殿。屋上の位置に盃状穴（内田伸氏撮影提供）

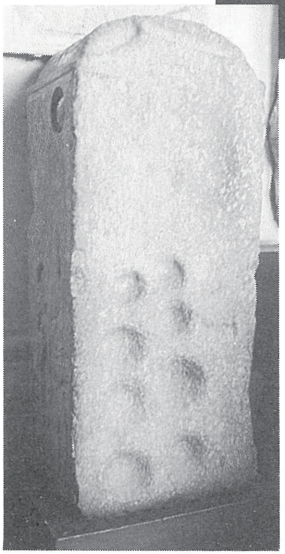


エジプト国立博物館の太陽神石柱の側面の盃状穴、紀元前1300～1350年ツタンカーメン時代（内田伸氏撮影提供）

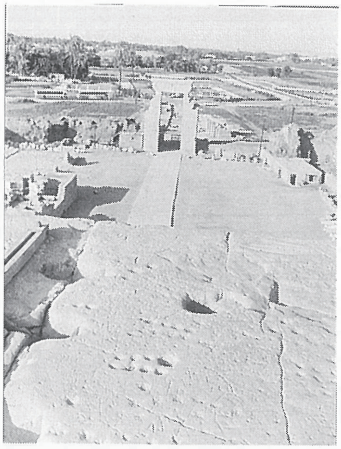
れらの写真を紹介され、次のように記されている。

ハトホル神殿は紀元前三〇～一〇〇年位のプトレマイオス朝後期の神殿で紀元前四〇〇年頃のローマ支配期まで使われていたとのこと。

三浦氏は「盃状穴考」（慶友社）で盃状穴を分類して次々頁のような表にしておられる。



近接写真



パラペットの盃状穴
（内田伸氏撮影提供）

ハトホル神殿のパラペット（手摺壁）
に盃状穴

近接写真
内田伸氏は２列に彫ってあるのが何か
意味があるのかとしておられる。

三浦孝一氏は全国の盃状穴を千三百例収集され研究を続けて毎年発表しておられる。

また、呉市で芸南盃状穴研究会を主宰されている小早川成博氏は、同じく「盃状穴考」の中で明治時代のレンガ製排水枡の上に発見した盃状穴について述べ、国分直一博士の分類として次の記載をしておられる。

凹穴の出来る場合は、

①河床の自然礫によって岩盤上に甌穴を作る場合。

②原始的事例として、経済的必要性からハンマーストーンで堅果、辰砂等を岩石上で砕いた結果、所謂「くぼみ石」が出現する場合。

③遊戯的なものとして出現する場合。

④呪術的信仰的意図をもって自然石、造形物に盃状穴を作る場合。

と述べておられる。

また藤井純夫氏は、カップマークを用途別に分類せ

盃状穴分類表

	一義的盃状穴		二義的盃状穴	
年代	原始・縄文時代	弥生・古墳時代	前半期 鎌倉～江戸前記	後半期 江戸前記～明治・大正頃
穿穴の目的	再生や不滅を願う。 生産の豊饒を願う。 原始的宗教儀式 韓国や中国より伝わった本来の意図を継いでいる。	死者の再生を願う。 生産の豊饒を願う。 巫女等が支配する儀式　死者の蘇生を願う行為等からの日本的宗教儀式として発展。	個人の願望 集団の願望 土俗的信仰儀式 （祈願・呪詛）	個人の願望 集団の願望 土俗的信仰儀式 （祈願・呪詛） 子供の手遊び
被穿穴品	山岳地の磐座 平地の岩盤面 洞窟内の壁面	霊山の岩盤面 （磐座） 平地の岩石類 古墳の石棺材	掘り出された石棺材 平地の磐座 有名な石造遺品及び建造物の周辺の石材	社寺の境内にある石造物 （手洗石、常夜燈、敷石等） 石碑・道標・棺置台
注記	○石皿及び石臼の用途があったと思われる石器類は除く	○宗教儀式として建物の基礎石等に穿ち丸石と共に鎮石とする（平安時代も含む） ○穀物の増産や生活の安全を願う儀式を磐座で行なった。	○古墳や遺跡からの出土遺品に穿たれた盃状穴に対する敬意や恐れの心情からの行為。 （遺品の模造行為） ○永続性のあるものに対する敬意からの信仰行為。 ○古墳発掘等による出土品（石棺材）にある盃状穴の形態模造と死者の祟りを恐れることから行なった行為。 （鎮魂行為） ○村へ病気や悪霊の進入を防ぐ為に立石（境界石）を作る。その場合に巫女や呪術者が盃状穴等を穿つ儀式をして霊威を高めた。 （呪詛行為）	○穿穴行為が他人に知れると効果がなくなると言った類の口伝による迷信。 （迷信行為） ○有名遺品に穿たれた形態の模造。 高野山や東大寺参拝者による各地への伝播。 ○昔からある盃状穴に対する信仰。 （窪石信仰の一種） ・穴に溜まった水で眼を洗う。 ・穴に溜まった水を飲む。 ・穴に溜まった水を薬として付ける。 ○死者の祟りを恐れることから起った行為。 （鎮魂行為） ・墓地における棺置台盃状穴。 ○トリモチ等を作ったり、草の汁などを作った跡。信仰で穿った穴を子供達が大きくした場合が多い。

三浦孝一氏「盃状穴考」播磨からの展望　（1990. 5.30）

られ、

①石臼としてのカップマーク。

②液果の搾油施設における付帯設備としてのカップマーク。

③祭祀および葬制の一環としてのカップマーク。

④遊戯盤としてのカップマーク。

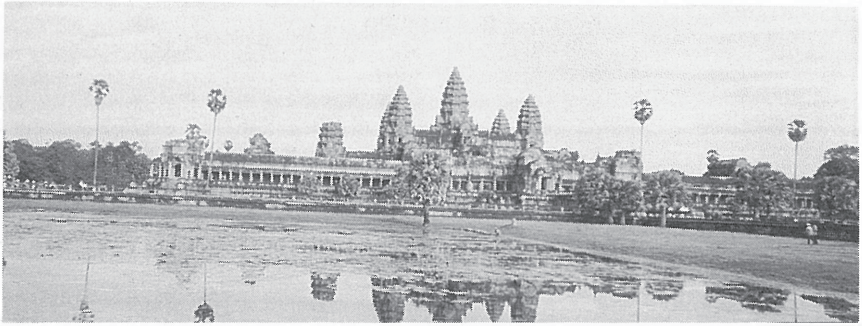
の四種に要約されている。

『盃状のくぼみの出来方について』小早川成博氏報告（国分直一氏・藤井純夫氏分類）

カンボジア・アンコールワットの盃状穴

大内史談会の竹重勇二氏は神田山古墳の発掘のきっかけをつくった石棺の発見者であるが、一九九二年カンボジア旅行の際に寺院の敷石上に盃状穴を見つけられ撮影された写真を紹介する。

アンコールワットはカンボジアのスールヤヴアルマンⅡ世が建設をすすめて一一五〇年頃完成した。「首都の寺」といわれ、ヒンズー教のヴィシュヌ神を信仰



アンコールワット
（竹重勇二氏撮影・提供）

アンコールワットの敷石上の盃状穴

タイ　ピマイ遺跡板石上の盃状穴
（竹重勇二氏撮影・提供）

した王が自らの霊廟としたが、後に仏教寺院となった。

おわりに

盃状穴は一九八〇年、神田山石棺で発見され、国分直一博士が確認されてから、日本国内のいたるところで発見が相次いでいる。インターネットで検索しても一〇〇以上のサイトがあり、専門家からアマチュア研究家や古代文字研究者などの発見事例の発表と様々な解釈が見られる。この習俗の意義と伝承には、余程のタブーがあるらしく謎につつまれている。中村徹也氏は穿穴行為の時間的空間の中に意味があるとして、残された盃状穴そのものは、その結果と述べておられる。穿穴に用いた道具が盃状穴の側で発見されていないのも不思議だ。「呪術的祈願を公けにすると、その効力が消失する。」との原始心性が、近世の盃状穴形成までの底流に潜んでいるように思える。今後の解明を待ちたい。

なお、盃状穴について伝承をご存知の方は御教示・ご連絡を下さい。

【連絡先】 山口ふるさと大学（柴田病院内）
〒753－0215 山口市大内矢田385
TEL 082(927)2801
FAX 083(927)5630

《参考・引用資料》

「神田山石棺」　山口市教育委員会編（一九八一）
「えとのす」七号・十五号・十七号・十九号・二十三号・三十号　新日本教育図書株式会社
「盃状穴考－その呪術的造形の追跡」　国分直一監修、国領駿・小早川成博編集　慶友社（一九九〇）
「下蒲刈町の盃状穴」　下蒲刈町（一九八五）
「娑羅」十八号　常民学舎（一九九五）三浦孝一
「蒙談」三十号・三十一号　柴田眼治
「日本醫学史」　裳華房　富士川游